

「合掌の道」

川島 弘之

(一)

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました川島と申します。茨城県水戸市の報佛寺で衆徒をつとめております。報佛寺は『歎異抄』の著者、唯円さんの開基のお寺で、現在地から南へ七百メートルほど行った所に、唯円房が最初に道場を開いた「道場池」が今も田んぼの中に残っています。

私は「蓮如上人御影道中」に七、八年前から参加させていただくようになりまして、そこで藤原さんにお会いし、今日のご縁を頂きました。名古屋別院の大きさにびっくりしました。初めて来ましてこんな大きなお寺があるのかと。やはり尾張門徒の伝統と言いますか、そういうものを感じた次第です。今日は御影道中のお話をさせていただきますたいと思いますが、御影道中に参加されたことのある方はどれくらいいらっしゃると思いますか。あ、そうですか。はい、ありがとうございます。

今年も、御影道中が近づいて来まして、今年にはわたしが御上洛の幸領を務めるものですから、先日三月十七、十八、十九と三日間かけて、お立ち寄り会所に挨拶に行つてまいりました。福井から滋賀の方へ移動する山の辺りは、まだ雪が一メートルぐらい道路沿いに積もつていてなかなか大変でしたけど、五月に御上洛(福井県・吉崎別院↓京都・真宗本廟)で向こうから帰つて来る時には、もう雪は溶けて、爽

やかな五月晴れのいい天気になっているものと思います。

先ずこの御影道中がいつごろ始まったのか、簡単な資料を用意しましたのでご覧いただきたいと思います。

蓮如聖人略年譜(御影道中開始に至るまで)

応永二年(1415)	東山大谷で誕生(親鸞聖人示寂154年後)	
長祿元年(1457)	本願寺第八代留守職を継承	四三歳
寛正六年(1465)	延暦寺衆徒、大谷廟堂を破壊する	五一歳
文明三年(1471)	越前吉崎に坊舎を建てる	五七歳
文明二年(1480)	山科本願寺御影堂上棟	六六歳
明応六年(1497)	大坂石山坊舎完成	八三歳
明応八年(1499)	三月二十五日 山科にて示寂	八五歳
吉崎惣道場門徒、二十五日講を開く(蓮如忌の始まり)		
慶長一六年(1611)	教如上人、蓮如上人御影を吉崎惣道場に下付	

(御影裏書)

.....
延宝一六年(1673) 蓮如上人御影道中開始(本年三五二回目)?

蓮如聖人は文明三年から七年までの四年間、吉崎に坊舎を建て、そこを拠点にして北陸一帯に広くお念仏を広められたんですね。そして文明十二年には吉崎を去つて山科本願寺、それから、さらに大坂本願寺を建てられて、明応八年、一四九九年の三月二十五日に山科で示寂されました。それを聞いた吉崎惣道場の門徒衆はそのご命日に「二十五日講」を開くようになりました。これは今も吉崎で開かれていて、今日も開かれています。で、その二十五日講が蓮如忌の始まりになったといわれています。

その後、時代が下りまして信長の時代になりますと、信長は天下布武を目指して一向一揆の殲滅を計るわけです。そして十年間にわたる

石山合戦が展開されます。顕如上人は和議に応じたのですが、その子教如上人は、徹底抗戦して越前から越中の方へ逃れて戦い続けたんです。その時に、教如上人を支えたのは吉崎惣道場の門徒衆だったといわれています。教如上人は、後に東本願寺の法主に就いた時、吉崎惣道場の門徒衆に、お札に蓮如上人のご絵像（御影）を下付しました。

ところがですね、その後、資料では点線を入れて、クエスチョンマークも入れてありますけれども、その辺りのところがどうももう一つ、色んな本を読んでも分らない。年代が特定できないような曖昧さがありまして、そのように表現しているんですけれども…

江戸時代になって本願寺が東西に分裂しますと、吉崎でもお東とお西の門徒によって御坊山の争奪戦が展開されるようになります。その時に、教如上人が下付したご絵像がいったん本山に引き上げられたんですね。それで、その時に吉崎惣道場の門徒衆は、「せめて御忌法要の間だけでも御影にご下向願いたい」と願ひ出て、御影道中が始まったといわれております。今年はそれから三百五十二回目になりますので、単純に計算すれば延宝元年、一六七三年から始まったと考えられるんですけれども、一年間に二回行われたという記録もありまして、実際にはもう少し後になってからだろうといわれています。いずれにしても、今年は三百五十二回目の御影道中ということになります。

わたしは昨年御下向（京都市・真宗本願寺福井県・吉崎別院）の供奉人を務めました。供奉人というのは御影を運ぶ役目なんですけど、供奉人になって初めて経験したことなんですけれども、まず供奉人は吉崎別院に集まって、いろいろ準備をするんですね。その準備の中で、蓮如忌のために本堂に幕を張ったりもするんです。それを済ませてから京都に戻って、翌日御影と共に京都を出発する。蓮如上人の御影をお輿車に積んで京都を出発します。（※「御下向」毎年四月十七日～二十三日、「蓮如忌（蓮如上人御忌法要）」吉崎別院で毎年四月二十三日～五月二日、「御上洛」毎年五月二日～九日）

つまり御影道中というのは蓮如忌の為に行われる行事なんだということです。いまは御影道中にばかりスポットが当てられて、蓮如忌の方は影がうすくなっていますが、実は蓮如忌の方が中心なのです。しかしそれがやはり三百五十二回も続けられてくる間に、御影道中は御影道中として独自の発展を遂げてきたんですね。御仏事としての信仰形態を培ってきたように思います。わたしはこれまで自主参加で二回、それから供奉人として二回参加しておりまして、今度が五回目なんです。その道中に参加した経験から感じたことを、先ず三つの印象としてお話しさせていただきたいと思います。

（一）

まず第一に、御影道中が進む道は「合掌の道」だということです。それはどういうことかと言いますと、道中は御影のお供をして、京都から吉崎までの二百キロを六泊七日で歩くんですね。そして十日間の蓮如忌を経て、五月二日から五月九日まで、今度は琵琶湖東岸を二百二十キロ、七泊八日で歩くわけなんです。お触れを出しながら歩くんです。触れというのは、こんなふうにするんですね。「れんによくしよくにんくさまのく、おとおくりく」とこういうふうになります。先触れ、中触れ、後触れとあります。先触れがまずそういうふうにするんです。御輿車の百メートルぐらい前を歩きながらやるんですね。すると今度は、五十メートルぐらい後を行く中触れが、やはり「れんによくしよくにんくさまのく、おとおくりく」と繰り返すんです。それを受けて後触れ、つまりお輿車を引いている人たちが「おとおくりく」とやる。そういうふうに触れを出しながら進んでいくんです。市街地を歩いている時はあまり反応はないんですけど、琵琶湖を離れて、高島（滋賀県高島市）の山の方に入っていきますと、集落の路地から、そのお触れを聞いて人々が走り出てきてお賽銭をあげて合掌する。初めてその光景を見た時には、何か時代劇のワンシーンを見るような思

いがしました。そうして、さらに進んでいきますと、田んぼがありました。その田んぼを隔てて三十メートルぐらい奥の土手の上で一人のお婆さんが、うずくまるようにして合掌しておられました。驚きましたね。このお婆さんの背後には、いったい何があるのだろうと思いましたが。そのお姿がとても尊く思われまして、私の蓮如道中の第一印象と言えば、その光景なんです。

それから三年間、コロナのために徒歩による御影道中は中断されてきました。それで四年ぶりに参加した時、たしかこの辺だったなと思って歩いていると、やはりその同じ場所、その田んぼの向こうの土手の上に、そのお婆さんが、前よりもっと背中が丸くなって、草叢の中にうずくまるようにして合掌されていたんです。感動しましたね。私も思わず立ち止まって合掌してしまいました。四年間も御影をお待ちになっていたのです。

ミレーの「晩鐘」という画があつて、地平線の向こうに夕陽が沈んで辺りが暗くなるころ、若い農夫の夫妻が、遙かな教会から響いてくる晩鐘の中で祈りを捧げているんです。足元にはその日収穫されたジャガイモが転がっている。大地の恵みを神に感謝しているんですね。背景に広がる地平線は永遠なるものの象徴です。その画が好きで、書斎の壁に飾ってあるんですが、合掌する姿こそ人間のフォルムの最も美しい姿なのではないでしょうか。

拝みつつ 拝まれて行く 蓮如興

後藤金三郎さんの句です。「拝みつつ 拝まれて行く 蓮如興」、興の中では蓮如さんも拝んでいるのですね。

門の前で家族総出で合掌される家もあります。ちょうど田植えの準備が始まる頃で、トラクターで田んぼをおこしているお父さんはそのトラクターのエンジンを止めて、田んぼの中から合掌される。畑仕事

をしているお母さんは畑に膝まづいて合掌される。子どもまでがお賽銭を上げて合掌するんです。子どもといえはお小遣いをもらうものとか思っていないでしたので、お賽銭を上げて合掌する子どもの姿には新鮮なものを感じました。女の子は庭先の花を摘んでお輿車を飾ってくれます。そういうことで、蓮如道中はまさに「合掌の道」なんです。それが私の第一印象です。

そして第二の印象はどういうことかと言いますと、道中は、真宗の土徳に溢れているということです。道中にはいろいろな物語が残されており、命懸けで信仰を守ろうとした「堅田源兵衛の物語」とか、ちよつと滑稽ではありますけれども「言うな地蔵の物語」、それから「嫁替し肉付きの面のお話」とか、そういう物語が道中の所々に残されています。

それから、御下向の時の最大の難所といわれる木ノ芽峠、ここは標高六二八メートルの峠道なんですけれども、昔はそこしか北陸道に繋がる道はなかった。それで、紫式部とか、あるいは鎌倉新仏教の祖師たち、親鸞、道元、日蓮、みんなそこを通りました。戦国時代には信長や秀吉のような武将もそこを通り、江戸時代には松尾芭蕉もそこを通った。その木ノ芽峠には御輿車は入れないので、そこは参加者が交代で御輿を担いで越えていくんです。

途中、「会所」と呼ばれる七十か所の寺院や民家に立ち寄りながら行くわけなんですけれども、立ち寄る民家はだいたい家の間取りが田の字になってまして、襖を外すとそこが一挙に三十畳、四十畳の聞法道場になるんですね。所によつては、そこに高座が用意されている所もあります。それはつまり、かつてそこで説法があり、お講が開かれていたということの証ですね。

それから仏壇が大きい。仏壇が一間くらいあるんです。床の間には蓮如上人直筆の六字名号が掛けられていたりします。

そういうことで、道中は正に真宗の土徳に溢れている。そういうこ

とが言えると思うんです。あるご婦人はお賽銭を上げながら「蓮如さんをよろしくね」と言われました。その言葉も胸に沁みましたね。なんかこう、親しみをこめて「蓮如さん」「蓮如さん」「蓮如さんをよろしくね」って言うんですよ。蓮如上人の教えが土徳となって相続されているんです。

そして最後に三つ目の印象としましては、蓮如道中は道中そのものが「歩く僧伽」であり、「歩く道場」であるということなんです。途中七十ヶ所の寺院や民家に立ち寄りながら行くんですけれども、会所に着きますと、お輿車から御影を下ろして仏壇の前に安置して、その前で教導さんを中心にお経を上げるんです。『嘆仏偈』が多いですけれどもね。それから教導さんのご法話があります。七十ヶ所でご法話するんです。短いご法話ですけれども、それをそのお待ち受けの家族、親戚、近所の人、それからわれわれ供奉人、自主参加の人、それから協力隊、みんなでそれを聞くんです。そしてまた次の会所へと向かうんです。つまり御影道中は歩く道場、歩く僧伽でもあるんですね。そういう三つの印象が私にはあります。

〈三〉

吉崎御坊の最初の階段をあがりますと、そこに三味線婆ちゃんの碑があります。三味線婆ちゃんについてご存知の方はいらつしやいますか。あ、お二人。あ、三人。あ、四人。はい、ありがとうございます。三味線婆ちゃんの碑があるんです。一メートルぐらいの丸い石なんですけど、その石に、

地ごく極らく 丁半かけて 弥陀にとられて 丸はだか

と、こういう言葉が刻まれております。三味線婆ちゃんは御忌法要の間、十日間、毎日ゴザを敷いて三味線を弾いて、自作の念仏の歌を歌

って、そしてお賽銭を集めていたんですね。集まった投げ銭は全部ボストンバッグに入れて本山に届けたそうです。すると、乞食のようなみずばらしい恰好をしているので、本山の係の人は初めは取り合わなかった。ところが、その時の宗務総長暁鳥敏先生が「ぜひ会いたい」と仰って、総長室に婆ちゃんを招いたそうです。そこで婆ちゃんは三味線を弾いて歌を歌ったんですね。それに感動した暁鳥先生が「三味線婆ちゃん」という名前を付けて、三味線婆ちゃんの名付け親になったというエピソードがあります。

実はわたしは、その三味線婆ちゃんに一度だけお会いしたことがあるんです。二十歳の頃でしたけれどもね、もう六十年も前のことです。二十歳の頃人生に行き詰まりましてね、生きていけなくなつて放浪生活に身を投じておりました。たまたま金沢の百百女木食堂という定食屋さんに身を寄せていた時に、お店のおばさんに面白い人が来てるから会ってみたいかと言われましてね。それで婆ちゃんに会いに行きました。定食屋の二階に婆ちゃんの泊まる部屋があつたんです。恐る恐る襖を開けましたら、そこに丸坊主の日焼けしたお婆さんが端座しておりまして、いきなり「あんた一日一日ケリついてまっか？」とこう尋ねられたんです。「一日一日ケリついてまっか」と、こう聞かれたんです。私は何のことやら分からないで、ポカンとしていましたら、婆ちゃんは、「わてはなあ」と言つて自分の境遇について話してくれました。天涯孤独の身なんだけれども、生活保護も受けなくて三味線片手に、乞食（こつじき）の修行をしていると言うんです。

後日、「一日一日ケリついてまっか？」という言葉は、「あなたは今日死んでもいいといういのちを生きていますか」と問われていたのだということに気づきまして、河北潟のほとりの髑髏庵まで婆ちゃんを訪ねてゆきました。なんと髑髏庵ですよ。それは間口一間、奥行き二間の掘つ立て小屋でした。入口に柱が一本立っていて、その上に確かに髑髏が置かれていました。本当なんです。髑髏がね。

残念ながらその日も婆ちゃんは乞食の修行に出かけていて、お会いすることはできませんでした。そして、その四年後にその髑髏庵でひっそりと息を引き取りました。ですから私は婆ちゃんには一期一会、本当に一回だけ、百百女木食堂の二階で一回会っただけなんです。しかしその言葉は今も忘れられないでいます。「あなたは一日一日、今日死んでもいいという命を生きていますか。」こう問われました。

この婆ちゃんの生涯は本当に波瀾万丈、話し始めるとこれだけで終わってしまいますので、これ以上話しませんが、昭和五十四（一九七九）年の秋に小豆島へ林曉宇さんを訪ねられて、そしてそれから本土に戻って金沢別院の報恩講に出て、崇信学舎の報恩講に出て、百百女木食堂にしばらく滞在して、そして十二月三十一日に髑髏庵へ戻ったんです。正月過ぎて、三ヶ日過ぎてても全くその姿が見えない。テレビはつけっぱなし。それで、近所の人が入ってみたら、林檎の木箱を幾つも並べて作ったベッドの上で合掌して亡くなっていたそうです。合掌してね。そういう最期でした。

それで、この三味線婆ちゃんがですね、資料の二のところにあげておきましたけど、

どこで死のうと 倒れようと 息切れ眼の閉じ次第 そこがそのま
ま お浄土や

こういう言葉も残しているんですね。「どこで死のうと倒れようとそこがそのままお浄土や」。道中歩く時には、わたしはいつもこの言葉を思い出しながら歩かせていただいております。

（四）

それにしても御下向二百キロ、御上落二百二十キロ、これは新幹線

で行けば一時間です。それをどうして六泊七日、七泊八日かけて歩くのか。なぜ歩くのかということですが、それはもちろん供奉人として蓮如上人のお供をする。御影のお供をする。蓮如上人のご苦勞を追体験する。そういう意味があると思います。しかし、私には私なりの理由があって参加しているんです。それはどういうことかと言いますと、私は、「いま」、「ここ」に生きていると。「いま」「ここ」なるいのちを生きていると。そういうことを確かめるために、実は参加しているんです。私たちは自我意識を持って、そしてものを思う者として、常にここではないどこか、今ではないいつかを探しながら生きていますね。しかしそれは私の思いであって、身はどうかと言えば、この身はいつも「ここ」にあるんですね。そして、思いが正しいか身がただしいかといえば、身の方が正しいんです。身はいつも「ここ」にあつて、「いま」を生きている。そのことを分かりやすく説明しているのが、資料の三の道元禪師の『正法眼蔵』『現成公按』です。一部分ですが、「いま、ここなるいのち」と題して引用しました。

たき木はひとなる、さらにかへりてたき木となるべきにあらず。
しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。しるべし、
薪は薪の法位に住して、さきありのちあり、前後ありといへども、
前後際断せり。灰は灰の法位にありて、のちありさきあり。かの
たき木、はひとなりぬるのち、さらに薪とならざるがごとく、人
のしぬるのち、さらに生とならず。しかあるを、生の死になると
いはざるは、仏法のさだまれるならひなり、…生も一時のくらゐ
なり、死も一時のくらゐなり。

薪が燃えて灰になると私たちは認識しますね。しかしそうではないというんですよ。そのように見てはいけないといっているんですね、道元さんは。薪は薪の法位に住して先あり後あり、前後ありという

も前後際断せり。つまり、薪の時は薪、灰の時は灰。瞬間瞬間の連続です。われわれは常に「いま」「ここ」なる命を生きている。そのことを、この最後のところですね、「生も一時のくらゐなり、死も一時のくらゐなり」と、こういうふうにおっしゃっているんですね。

蓮如上人も「仏法には明日と申す事、あるまじく候う」（『真宗聖典』第二版1047頁）と言われています。そういう、「いま」「ここ」なっているのち、それが私たちが生きているのちの実相だと思ふんですね。道中を歩くということは、身をもつて歩くということですね。身をもつて歩く。その身には限界があるんです。思いは空間的にも時間的にも無限に広がりますが、身には限界がある。去年、供奉人をして御下向を歩いた時に、木ノ芽峠を越えて今庄の方に歩いていった時に、途中でダウンしてしまいました。その時、私はマイク係をやりましてね。「蓮如上人様の御通り」と大きな声で言うんです。そうやって一番前を歩いていくんですね。先導さんの後を付いて歩いていく。ところが「お通り」とやっているともう十歩ぐらい遅れちゃうんです。先導さんに。それで走って行って先導さんに追いついて、また「蓮如上人様の」とやるんです。それで、もうくたびれ果てて、木ノ芽峠を越えて今庄に行く途中でダウンしてしまいました。本当に情けなかったんですけれど、最後は協力隊の車に乗せてもらいました。

その時に、「歩拝」という言葉を思い出しました。これは太田浩史さんに聞いた話なんです。歩拝という言葉があるんだぞって。太田さんに聞いたことなんです。登拝というのは聞いていたんです、前々からね。富士山登拝とか立山登拝とか、そういう言葉ありますね。つまり山の上には神がいますからね。神が鎮座しますからね。それを登って拝むんです。拝む為に登るんです。それが登拝なんです。

しかし歩拝という言葉もあるというんです。つまり、歩き疲れて拝む。拝む為に歩く。これが歩拝だということです。身をもつて歩くことを通して、身の限界を知る。限界を知ることによって無限なるものに出

会う。そういうことがあるのではないかなと思います。

（五）

それから、もう一つ忘れられないことをお話しますが、それは今庄の浄念寺（福井県南条郡）での体験です。二〇二三年に御上洛に参加しました。蓮如忌が終わって吉崎から京都へ帰る途中のことです。

湯尾峠とか栃ノ木峠とか、そういう大きな峠を越えて琵琶湖の方に来ます。ところがその前の年に北陸豪雨があつて、その年は湯尾峠も栃ノ木峠も通行不可になっていたんですね。

三日目の宿泊会所は浄念寺です。湯尾峠を越えずに迂回路を行ったので、予定よりかなり早く着いてしまいました。普通は夕方の五時から六時頃着くの、その日はもう二時頃に着いちゃったんです。そうしたら浄念寺のご門徒の皆さんが一生懸命、提灯の柱を立てたり、本堂に幕を張ったりして、御影の到着を待つておられました。まだ太陽は頭の上にあります。浄念寺は高台にあつて、今庄という宿場町を一望にできます。その宿場町の真ん中を日野川という川が流れている。その川の向こうは小高い山になっていて、ちょうど五月の新緑の季節ですから、ところどころその山の斜面に朴の木の白い花が咲いているのが見えました。私たちは、日野川の向こう側にある公衆浴場に行つて汗を流しました。帰ってみると、もうすっかお迎えの準備を終えた門徒の人たちが、本堂でゆっくり休んでおられました。車座になって世間話をしたり、本堂の隅の方で昼寝をしたりして、静かに過ごしておられました。ときどき時代物の柱時計がボンボンと鳴るんです。皆さんそれぞれ家庭があつて、お仕事もあるんでしょうが、帰らない。夕方のお勤めまでずっとそこで待つておられる。そこだけ時間が止まっているような感じがしました。そして、「この安堵感は何だろう。この静けさはどこから来るだろう」と思いました。回廊で何かぶつぶつ言っているお爺さんに声をかけてしばらく話をしていたら、そのお

爺さんがこんなことを言うんです。「この世は雨宿り、本当の仕事は死んでから始まる」。びっくりしました。「そろそろ極楽参りさしてもうて、それからが本番や」。そんな言葉が自然に口を突いて出てくるのです。

翌日は栃ノ木峠越えです。普通だったら浄念寺は朝六時には出発するんです。四時半には起きて、おにぎりを食べて六時には出発する。ところがその年は栃ノ木峠も通行止め、マイクロボスで峠の向こうへ移動することになりました。出発は九時です。時間がたつぷりあったものですから、近くの白髭神社まで散歩に出ました。そうしたら途中でその昨日のお爺さんとすれ違ったんです。それでわたしが、「あれ、お爺さんどこへ行くんですか？」って聞いたんです。そうしたら二三步戻って来て、耳元で「お任せ」って言ったんですよ。昨日の話の続きなんです。そういう世界に生きておられるんですね。つまり、帰る所がはつきりしているんです。それでわかりました。前日のわたしの印象、「この安堵感は何だろう？ この静けさは何だろう？」というその安堵感、実は帰る所がはつきりしているところから生まれていったんですね。帰る所がはつきりしていればどこで何をしようとするか、安心して生きられるんです。そういうことを、浄念寺の皆さんに教えていただきました。

それでわたしは、自分の母親のことを思い出しました。母親は十五年ほど前に亡くなったんですけれども、大腿骨を骨折して肺炎を併発して、入院して十日間であつという間にこの世を去りました。九十五歳でした。わたしは若い頃に家出をして一年間ぐらい行方不明になっておりまして、母には大変心配をかけました。それでせめて最後は自分が看取ってやろうと思って、病室に寝袋を持ちこんで付き添っておりました。そのうち、母がどんな気持ちで最期を迎えようとしているのか気になりましたね、聞いてみました。「母ちゃん、後生のこと、はもう大丈夫なの？」って聞いたんです。すると母は、「後生って何

よ」と逆に聞き返してきました。しまったと思ったんですけど、もう引くわけにいきませんから、「死んだ後のことだよ」って答えたんです。すると母は、「死んだ後のことなんて考えてみたこともないよ」と言って笑いました。すっかり肩透かしをくってしまいました。まあ、いま思えば素晴らしい答えだったと思うんですけどね。わたしたちは「いま」を生きているんですから、死んだ後のことなんて考えたこともないよ。

母は合理的、科学的な考え方を持っていましたので、死んだら火葬場で焼かれて骨になる、あるいは灰に帰す、あるいは土に帰る、こんなふうに思っていたのかもしれませんが。「お浄土で待ってるよ」とか、あるいは、浄土とは言わなくても「向こうで待ってるよ」とか、せめてそんなふうに言うて欲しかったんですけど、死んだ後のことなんて考えてみたこともないよって、こう言うんです。ところがその母が、いよいよ最後の時が来て、意識が朦朧うとしてきた時に、突然「今から弘道連れて部原（へばら）に帰る」と言い出したんです。今から弘道連れて部原に帰る。弘道というのは、実は私は七人兄弟の上から五番目なんですけど、一番上の兄のことです。長兄は二歳の時に脳性小児麻痺を患って、障害者になりました。母は最後までその長兄のことが気がかりだったんですね。九十六歳の、いま死なんとする母親が、七十を過ぎた障害者の息子を連れて今から部原に帰ると言うんです。部原というのは母の実家なんです。ところがその実家にはもう誰もいないんです。そんなふう到最后の最後に帰る所がなくて迷い出した母親の姿、それを思い出しました。

〈六〉

帰る所。わたしたちはどこから来てどこへ帰るのか。「死んだら終わり」、「せめて生きている間に人生を楽しみたい」と、享楽を求めて右往左往して生きています。この、帰る所がないということが、現

代人の最も大きな問題ではないかと思えます。源信僧都の『往生要集』に、「われいま帰するところなく、孤独にして同伴なし」という言葉があります。地獄の中でも最も苦しい無間地獄をあらわした所にこの言葉が出てきます。帰する所がない。これが一番苦しいことだと。

それではわれわれはどこへ帰るのか、そのことを、非常に分かりやすく示しているのが『安心決定鈔』だと思えます。

しらざるよきのいのちも、阿弥陀の御いのちなりけれども、いとけなきときはしらず、すこしこざしく自力になりて、わがいのちとおもいたらんおり、善知識、もとの阿弥陀のいのちへ帰せよとおしうるをききて、帰命無量寿覚しつれば（「帰命無量寿」というのは南無阿弥陀仏ですね。「覚しつれば」とは気がつけばということですね）、わがいのちすなわち無量寿なりと信ずるなり。かくのごとく帰命するを、正念をうとは釈するなり。

（『真宗聖典』第二版1147頁）

わたしたちは、知らないでいる時でも、実は阿弥陀のいのちを生きている。その阿弥陀のいのちは、それでは何かというと、これは、ア、ミータ。サンスクリットで *amita*。aはnot。英語に訳せば *not limited*、無限、限らないのちを、わたしたちはもともと生きているというのです。

それは科学的にも言えることで、例えば、福岡伸一という分子生物学者が、「環境は身体を貫いている」と言うんですね。環境は身体を貫いている。それは、私たちは毎日、三度三度の食事を頂いているわけですが、摂取されたタンパク質が体内でどのように変化していくか、実験でマークをつけて観察してみると、一部はエネルギーとなって排泄され、一部は筋肉になったり血液になったりして体内に蓄積される。しかし蓄積されたものも新陳代謝によって生滅を繰り返していつて、

何ヶ月か経つと私たちの体は別人になっているといえます。だから、環境は身体を貫いている。身土一如とはそういうことですね。身と身を取り巻く環境世界は繋がっているんです。

それから、これは古い言葉ですけど、二宮尊徳の歌に「父母もその父母も我が身なり我を敬せよ我を愛せよ」と、そういうのがあるんです。私たちは両親のDNAを受け継いで生きているわけですね。両親にはさらにその両親、祖父母のDNA。祖父母には祖父母の親のDNA。これをずっと遡っていけば、生命の誕生まで遡るわけです。あるいは宇宙の誕生まで遡る。その繋がりが一つでも断ち切られていればいまの私たちはないわけです。つまり、わたしたちは空間的にも時間的にもひと繋がり、いのちを生きているというわけです。それが「しらざるよきのいのちも、阿弥陀の御いのちなりけるを」。そういうことだと思えます。

ところが、私たちは「こざしく自力になりて」、知恵分別が付くと、その分別知によって身と土を分断してしまふ。環境世界を対象化して、自分の手段にしてしまふ。そして生死一如のいのちを、生と死に分断し、生のみを自分のものとして死を排除して生きようとする。そこに大きな問題があるわけです。

幼子がしだいしだいに知恵づきて仏に遠くなるぞ悲しき

こういう古歌もあります。これは一休さんが詠んだ歌だともいわれています。知恵が付くことによって、分別を持つことによって、わたしたちは身土一如、生死一如の真実に背くようになるのです。

我・我所、自分・自分のもの、こういうふうにならなれたの分別知は、途方もない迷いの世界にさまよい出していく。泳ぎ出してしまふ。そういうことを言っているんだと思います。

最後にもう一つ、これは高見順という「最後の文士」と言われた作

家の『死の淵より』という詩集の中に出てくる「帰る旅」という詩です。

帰れるから

旅は楽しいのであり

旅の寂しさを樂しめるのも

わが家にいつかは戻れるからである

だから駅前の上つからいラーメンがうまかったり

どこにもあるコケシの店をのぞいて

おみやげを探したりする

この旅は

自然へ帰る旅である

帰るところのある旅だから

楽しくなくてはならないのだ

もうじき土に帰れるのだ

おみやげを買わなくていいか

埴輪や明器のような副葬品を

大地へ帰る死を悲しんではいけない

肉体とともに精神も

わが家へ帰れるのである

ともすれば悲しみがちだった精神も

おだやかに地下で眠れるのである（以下略）

高見順は喉頭癌で亡くなりました。その最期にこういう詩を書いたんですね。しかし高見順も、この詩を読むと、私の母と同じように科学的合理的な考え方、死んだら骨になる、死んだら土に帰る、死んだ

ら無になる、死んだら自然に帰る、こんなふうに考えていたのではなかったでしょうか。そして実は現代に生きる人びとのほとんどが、そのように考えているのではないのでしょうか。「死んだら終わり」、このニヒリズムをいかにして超えるかが、現代の課題と言えるのではないかと思います。だから私は、この傍線を引いた部分ですね、傍線を引いた部分を「阿弥陀のいのち」という言葉に入れ替えれば、これは素晴らしい詩になる。こんなふうに思っているわけなんです。

今年は、蓮如上人の井波御下向五百五十年という記念すべき年で、いま太田浩史先生が中心になって「蓮如上人井波御下向五五〇周年記念御影道中」が計画されています。御影道中は決して伝統行事ではなくて、無明の我を照らし、無明の人類を照らす、そういう智慧だと思っていますね。そういうことで、ぜひ皆さまも一度、御影道中に身を運んでいただいて、一区間でも結構ですからね、歩いていただけたらありがたいと思います。

ちよつと話があちこちしてしまいましたが、以上で私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

〈質疑応答〉

A

失礼します。三味線婆ちゃんの話をしていたきまして、資料にも言葉を出していただいているんですけれども、「弥陀にとられて丸はだか」というんですが、その三味線婆ちゃんがどのようにその世界に出あっていたのか、おそらくは、素直にすんなりそこに進んだのではなく、紆余曲折はあるんじゃないかなと思うんですが、その辺りのことを教えていただきたいなど。

川島

三味線婆ちゃんは石川県の河北潟の畔に漁師の娘として生まれて、十七歳の時に大阪の芸者置屋に奉公に出されたんですね。それでそこで芸を仕込まれて、一時は、吉本興業でエンタツ、アチャコ、そういう人たちと一緒に出演したそうです。やがて一座の座長になって巡業して歩くほどになりました。その頃が一番はなやかな時期で、ダイヤの指輪をいくつも付けていたというんです。

ところが結婚で失敗したんです。最初に結婚した人がやくざ者で、婆ちゃんの稼ぐお金を全部博打で使ってしまう。それで婆ちゃんもやり切れなくなつて離婚した。その後、今度は税理士をやっている人と結婚した。その人はまあ税理士だから、これは堅物だから大丈夫だろうと思うって結婚したら、なんと婆ちゃんが養子で貰っていた娘さんとその夫がいい仲になつてしまった。それで、地獄の苦しみを三年間過ぎたということです。ある時もう我慢できなくなつて、「わてを取るか娘を取るかどっちか決めてくんはなれ」と夫に迫つたというんです。そうしたら夫は、若い娘のほうを取つたというんです。それで婆ちゃんは、もうこの世にあてになるものは何もないと思つて頭を剃つてね、関東二十四輩巡りの旅に出たんです。その旅の途中でいろいろ

な出遇いがあつたんでしょう。はじめはこんな小さいお念仏だったのが、バツカイお念仏になつて帰ってきたと。バツカイというのは北陸の方言でもものすごく大きいというんですよ。バツカイお念仏になつて帰つて来た。それで、ああ、こんな広い世界があつたんだということに気が付いて、これはお札を言わなくちやいかんと思つて、その夫と娘のところへお札を言いに行ったというんです。二人は、いよいよ殺しに來たかと思つて逃げ出そうとしたそうです。「あ、待ちなはれ、待ちなはれ。実はわては、あんたらにお札を言いに來たのや。あんたらのお陰でこんな広いお念仏の世界に出あわせてもらった。ありがとうね」と、こう言つたというんです。そうしたら、向こうも「すまなかつた、申し訳ないことをした」と謝つて、三人で抱き合つて泣いたという、そんな話があります。夫に向かつてね、わてを取るか娘を取るかどつちかにしてくれと迫つた時に、夫は若い娘のほうを取つた、その時のことを、婆ちゃんは「地ごく極らく丁半かけて 弥陀にとられて丸はだか」と、そういう言葉で表現したんではないでしょうか。まあ、これは私の推測ですけどね。そう思っているんです。もともとね、私たちは裸で生まれて裸で死んでいくんですけれどね、それが婆ちゃんの一つの転機だったのかな、そんなふうに思います。

(二〇二五年三月五日 真宗大谷派名古屋別院 対面所)